雙魚書日載

大正四年六月下浣起筆

三十七

特別
14
1919
286

176561

漫画雑誌

大正四年六月廿日起筆

○名古屋に三絃の名手を訪ねる
小唄三大家の一人吾妻獅子
出家と光昇出家と
来訪者七名の合流する処
吸ふ煙草の煙七十と無人と
ここに先代杵屋六四郎
往く一の日りしを杵屋六三
味線それしさま女の嗜
を語る文句とそこと
北三絃を永平寺の

38- 9082

文三
野渡舟模様
柳緑陰濃

樂悔陶印

高サ八寸許
紐上部
(彼太湖石)

一面、
羅漢之像
を刻す

四吉院の茶柁(ママ)を材とし(ママ)ぬるもの八(ち)
木元左衛門)八個の三絵を付もの其一と云ふ
天井に菊の前(ママ)あり一二の巻物あり三大尊
和尚のものと云ふ(ママ)
外三個あり(ママ)その酒次つゐく(ママ)盛の玩具つゞ
も戦役しとゝき三味線にもを(ママ)ひくまねをし(ママ)
をしくまで困る唄をひくまねをし(ママ)名人と
謂ふべきまで奥儀をきわめ(ママ)ることゝ
り、(ママ)ゐく(ママ)面玩味の(ママ)し骨董のも
ゐも珍らし(ママ)神代上巻のもの(ママ)
ひそんじ不老の祝(親)等立ん(ママ)
出し(ママ)ゐし(ママ)

東京博物館

北印一好る南琴文庫ニ於テ今ニ流ひ
遂次某晋董鉢ニ至テ始テ獲る
所也時代荒きこと多し形の大
き所舎心、ニ刻も太ニ粗ニ過ぎ
る嫌ひ机上の友とする所以也

紀念のためとて提箱
とを恵まれ其雅ひの
をそゝしくんとを其頂天
によろこび叫くを人に托すると
そのうつくしきに驚ろかされ
りくとる夜味なり十七字を

五重塔ハ後ろの普文年の出来にて
寛永十三年ころ北塔を無かりそのひとり
ままころ之を計る事のやや加へることは宣
しくころのものあります。便宜上之をA
ましまた北斜角の外観の仮称Bの廊
する西浄即ち厠犬う廻廊の東南と
ある納庫ともつながる合りとを総計
その社殿門廊すべて一切の建物を今計し
えますと柱真で測って備かれハる二十五
坪とふ数を得たのでありますが試に之を
東京現在の建物と載べて見ますと日光
東照宮に属する一切の建物の大きさを東

が徐々に費が約二千余円となりますこと日光社寺大修復予算の数倍大江戸の士の財を奪さんとの説を唱ふるものあり、さうすることも平均一坪と二両四千五百円となる四を要しそれでも一坪と約して二万五千四百円となりまた前ひもの、一坪と二両五千四百円世界中絶えて無いそうしたものであるから、一坪と約十五両とのものを一坪と約十五両とのものであるから、一坪と約十五両とのものであるから、一坪と約十五両とのものであるから、

けおく

○もうこの前井上侯御来訪之節
しかるべき行先の風夜相談
御尤千万之義と大賛同之意を表
迄て帰と御申しおいもう今無
かゝる事ハ御心得の為ニ
ハあるまじくいろ〳〵の
まゝ後藤御帰京
相談を御済ニ
言葉ニ法もんかの
(ものかる)を其文ニ
こつき相談しようとの
東京原稿

なる事ハ困つた
流義をやめ
埼玉ニ
抱強
ぬこと、
都風俗を
くソンナ
ぬ松方
井上侯
別ニ

東林院蔵

日出ぬともうす住ンおらこうす
（寄れこの句ともおこころ）
花の陰わうの俤人をそうけす
（上略）
お当そそくみくらする針ス（猿）
ちりの分とそもも紙帳ス（唐傘）
心まで
古人をそうけす
思ふよりそもしそれも我ス
古ふる花もあるもの
ふく心をひく
（一葉落毎と共しそれてかんを

（子を思ふ歌よりの句のやう）
麻のきぬ

○六月廿三日 今日雅仙来る抱一の画幅五幅抱
一下絵断ち物大鉢一湯呑を個み好をいさ
ぢ抱二珍重のもの
味ある人ともくさんの意ありまめ
ることの乱めうの画幅を呈茶う
て

桂 紙本 堅帳

絵ある和漢人真画 抱一のおしなる
ことも真筆にも珍重の茶器のまま
おしなべ 一幅 [illegible]
雅仙 [illegible]
雅仙 小切る [illegible] 歌禅筆

嘉永

[illegible] 抱一 [illegible]
[illegible]

阿部仲麿 和歌

[illegible] 抱一摸
[illegible]

右まくて抱二の筆者

此内もの長持 [illegible]
羽根の三幅也流れと抱二の花七ツ為と
て小短冊 [illegible] 歌味も筆も [illegible]
ことこと一のもの [illegible]

東京帝國大學

紙を用意し行くを
ることの論う今
（至こうんうは今後の執
そを天に祈の投価う
田もと宮純放味う
南の秀をさんど徳川候と延音一行吉
うちることを羅漢寺の印を借う等けて
一陽に接することなど
和尚くもそ
○神内通過も無面の如来床の号こ拙く
べき悟如きこの投う
を受けしこと二年ぶりうも前のことろう取て

東京府原本

忘却ものことを文章
寺宿と悟空のことろ
黄蘗僧侶の寺院
つけるう、ものり
ある通もこ京北代禁の
筆、るうう無在真く
ひうんことと思ひ二
ら個ぬと話う悟を抜け夏
うぐし伴う人うも
あらば苦しうまん
給うこう

○道通禅師の偈傑作集中のアントニーとクレ

オパトラ」出版セラレ、コレヲ初メトシテ其後リアラユル方面ニ亘リテ其作ヲ発表セラルル者モ亦尠カラズ（中略）是等ノ諸作ニ一通リ眼ヲ通シタル人ニハ其作ガ如何ニ変化ニ富ミ如何ニ多方面ニ亘リテ居ルカヲ知リ得ベク、而シテ其作ノ変化ニ富ミ多方面ニ亘ルト云フ事ハ、即チ其作ガ如何ニ多ク人生ノ真相ヲ穿チ如何ニ多ク人生ノ秘奥ヲ探リ得タルカヲ証スルモノニ外ナラズ

河竹繁俊氏「日本の現代文学」

「日本の現代文学」

二十九世紀初頭ニ於ケル仏蘭西ノ代表的作家ノ一人タリシ「ハムレット」ト云ヘバ、ゴールリッヂガ今日尚ホ其ノ劇的ノ興味ヲ減ゼザル所以ハ、其ノ女主人公オフェリヤノ性格ヲ描キ得テ妙ナルニ在リ。

ハムレットヲ読ム

ハムレットヲ読ム

作ヲ歎称セラルル者モ亦稀ナラズ或ハ無條件ニ之ヲ讃美シ、或ハ其ノ欠点ヲ挙ゲテ之ヲ攻撃シ、或ハ其ノ女主人公オフェリヤノ性格ヲ描キ得テ妙ナルヲ賞シ、其ノ劇的興味ヲ減ゼザル所以ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト比較シテ其ノ優劣ヲ論ジ、或ハ又ハムレットトオールスタッフトヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト北条泰時トヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト世之助トヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト内匠頭トヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト梅川忠兵衛トヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト新五兵衛トヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト文彌トヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト心ノ妻ヲ比較シテ其ノ性格ヲ論ジ、或ハ又ハムレットト之ヲ此ノ如ク

人のうれと好対照をなします、現代の評の多数は
此点が巧みで英雄の弱点を言い得ていると
して仲人を勇ん化しようとするの作為の手腕を
認めんとするものが多うございますが
しかる乍ら人今の人情神化
宮本武蔵のロマンチシズム四今の自己拡
の米のハドスン氏が仏蘭西の本領をもって
描きそうなものを酒脱の筆をもって
ぎる文七は歌舞伎
るも、其れ
者をお神化
かるという

似ろも面白く扱下の撫や雲介の歎や烏
江の妓やまことおのく〳〵其面白きこと
無きにあらず、試に男性の無味を書きを
主きて死仕を合味ちん
楚国海を渡もつめき
課あが右芸心しろりレオパトラの特人こ
まことを卑しろも吟て特人こ
まことを卑屈うまきこと
それ日本語に課する論
通是を流れに芸心の未
旦那元祖と
拙生す

東京原本

クレオ　何かまい左右かあろやといふことは
それ其日限ひ切れてゐる、論を書屋が何
を言のをおことそれまでもされて
さいく、初めてう北
夫ま無くなく、わしが留
めてもめるやうれ思ひ
にもめまする事もあ
陰はあの女のまかや
アントニーの当日なとまる
クレオ人留守の最も立派
このかて事を葉うて
世のやお前が豚小屋

昭憲皇后の御肉を以て
上皇の一切唯心の御
完きを両親御潤慶の喇嘛
大和尚の書と悦ぶ
つゝも玩味するものゝ
んとする御物也帳
真を精細へんとす
○中村六〇（茶同窓会）二茶の書簡を不朽の
よきものを持ち出
御物など拝して
手紙拓のこの書
一基の墓（墓を毎年

東京高裁

縄帯一の怪いくさの雲
句碑のある寺も一基
いのちのうた

外に一二句を拾ふ

藪おやまくれの梅の花

無限悲有限命

北斗より星のこぼるる夜寒かな

日の暮れ急ぐ石蕗寺詣

その下に椿拾ふ也又

一筆を他の俳人と言つて句を長い手紙をかいておる

又事をこうくるまで句を長い手紙をかいておる、おもしろい味う事もおもしろい味う事もおる

その一現う家人みる

○先年の大地震の時の事ども

東京原稿紙

なる話しがあるが、今もおそろしくなる（六月廿八日の大地震）

第一美人がオめでたい美人がオめでたい

月見と言ふと西が茂神先祖

如何の美人が年でも

それ等や修を習つた

の業所を通の為りとも

吹て活ホーの文人もと美しい

お金との間を時よい

浮く二人をそろそろ動く卵い自分の集

和して第を大田垣蓮月の墓前に世話し

やうと乗気になつたが深世の愛の思し

披露講演

大阪

にて其大略を記せば
大阪市史は大阪の歴史を正面から観察したものであります。私は之れを側面から観察して見ようと思って居ります。元来大阪の歴史と云ふものは町人を中心としての特種の文化の発達で是れは全国に其例なく実に我国の歴史中に一異彩を放って居ります。随って大阪歴史の発達に就て研究すると云ふことは途中に於て一頓挫を来たし衰微の甚だしかった時代があり又は南北朝の時代で当時は兵庫港に拠って居つた為め自然此大阪を云ふものは忘れられて居つたそして昔は陸上の交通が甚だ不便であつた為め兎に角港であります。へすれば寧ろ大阪城を築いた豊臣秀吉が大阪城に移ってから云ふものは非常に此町人に重きを置いて居つた其結果堺と京都博多あたりから町人の主立つたるものを大阪に移住させたのであるそれが為めに一方堺の方は今日の如き衰微の状態を呈して居るのである。尚秀吉が朝鮮征伐から帰って色々な戦利品を大阪の町人の主なるものに分けてやつたのも見ても此の大阪の町人なるものが如何に勢力を有して居つたかと云ふ事が推し測られる云々

東京朝報

（柳も平安朝の代に於て三国川満運の便利から西の本多の一庄の開発を促し兵庫と相対する関税収入を南の朝廷信仰の大和良京都の神社仏閣を賄ふ足りが南北朝の争ひも北朝武家方の手に摂播地方を奪はれて南朝方の楠氏の滅亡を以て新たに摂津の湖市を起こすに至り堺が南朝の前衛として忠勤を擢ひたると云ふ大なる幸大寺の大仏の建立の時開眼式を行ふ此式に参列した一旦の儀式其他に参列した一旦の儀式其他に参列した一旦の儀式其他

語るなく

大仏殿高さ(奈良)高かの記録を今尋
ここでそれを使うとする
あとのびある、日仏世界を代の大きる
銅塊である、千年前之心つ
如ことをお思儀もそのんそのでも
ある、なぜなんの大きさものを作つた
に就を話説あるこの一寸大数の人
の手きうけるのうみるそれ徳う廣く
汎このふと云根拠うる割く生れ智
もないなんるものを作り生したものあ
うふて、あの技術をもあんまのよ

東塔原製

を優めたのち成功とそのそうらしい、係し今
おき仏聚を仏鋳像高時の矢筈
て事ことと云未一体像を中心をつて
するとうて内部もうんでも例外をそうとふ木
我の支くるものを地に残めたもそうふ又原
生を心つとの命ま遠来投げと体のとの
間に打ち元命ま届うさうと体の
光背う高根を
てねのと仏のの
とそうう笑うみ

根に於ての挙行を許すことゝ
後世大佛殿式を
根に天竺のことゝきこゆ
をおもしろい云
宝を巻き揚下の
華厳経の大佛殿を
奈良にて営ろ
こゝにそうぜん
高さ五丈九尺
を掛る
なり
遷座

訂の　一帙あるべみ方八十等のめるこそ
尾に頭注を備ふ価八十四とあり紀州の書肆の
りしことく出ることあと仏書の
を讃印譜とそ十枚備古物商書肆二冊を購ふ
元時本印譜甲四集一帙備古物商書肆
西堀江町書肆書林ふるもの又今古書
のよ数多ありて耳りこと
行きそこの書雲石書
他出一人なんを珍
董ふ金石書籍
用の脳拓
訪らいづこの書の装剣

東京帝国大学

也刀ふる方切の和紙ふる
せきたるを勤め納めまつるとの
心むりをもてこそこうこそ
右の和紙ふるけを用のる雨を刻しふる小
ふる身まて牙ふるの雨を刻しふる人の日
を盛ふ、ふ図あと一方、誠之三十あ日と
入れをふ御おをふる
身ふの二十日ふれを
ふるしこ家ふる
思いふるふる僧ふ
二帖ふ五時仏の印を刻
を手ふるのを去る

○叶わず帰られた寺の證誠式のことを
新しく式を改めて
の式を御覧に入れ
こんでそのまま今
く

本誓寺の報定
うあります斗一
上人の見えた
中興の慧
けてから、その立
されることであ

（六月二十日於京都答礼）

交換的お願いを一年交換と申し
ていたこんどは
その時分を
式を行う
前に
く執使つ
を同時刻に
興下の肩と
重役の
法務局の
して敬
交換的お願いを一年交換と申し一通つて
ていたこんどは一年七月頃を
その時分を厳重に
式を行う場合
前に平生
く執使つを
を同時刻に
興下の肩と接
重役の
法務局の
して敬

西こま[illegible]と傳[illegible]行[illegible]
[illegible]年[illegible]年[illegible]西[illegible]修学[illegible]年[illegible]宝祝
大河の話[illegible]堂[illegible]草[illegible]巡[illegible]巡中
[illegible]大河の[illegible]西の手[illegible]巡[illegible]
[illegible]と[illegible]本[illegible]奇[illegible]式後大寝(サネ)[illegible]
[illegible]の開[illegible]あ[illegible]小暮苦(サボ)の夏行(ゲギョウ)
[illegible]の名[illegible]を[illegible]
[illegible]の所[illegible]夏[illegible]
[illegible]のこと)

○京都[illegible]毎[illegible]大丸の話しが出[illegible]
[illegible]の中[illegible]大丸の[illegible]
[illegible]こん[illegible]

東棟原製

[illegible]、[illegible]伏元の下村の
代[illegible]の[illegible]
つれ街頭の人を手[illegible]
[illegible]くつ[illegible]大捕[illegible]
[illegible]あ[illegible]大丸を[illegible]
一具つの[illegible]
[illegible]の活[illegible]
和[illegible]
下村の家人[illegible]
人を殺[illegible]
[illegible]大丸事件[illegible]

未果と他好一人う兎角教訓上おもしろう
ぬ品奇物の動位をうけ正をもって炒のまことの
こうも此の正統を蔑ける
初めて知るの外いと
○芸林雑誌を遊びるに行くの書物を通う
又骨董をあさる、校合の書に湯ちうるものるく
七寛の頃等の物語の事古物語）に係
る平安時代の写本墨（文回、新撰万葉集
家上集）平安二波雑帖久仮二冊其他を
筆代の書体るも瞭かに花本久伝を内見山名
著る墓し（る外四更砂の校本を附すれ
ことのるも 年市役場の欠漏を補い二巻上

東京帝国大学図書館

考えるとるくさくさるも
て河の行行所如ちんの石本晴海と松る
の二三作品をるる時海の父を鏡商をし物
工の校如のを学ぶるる本多眼を免得意を
う所る史の仮名一二を見る、金るを森栽果
をするやと脱もーれむうそ本堂の上図
と学手（とるつ）堂しめる家の雲に
立すべしめる人珠玉ましる（二月廿の記）
ふうるるつて放句こくる
午後大丸呉服店を経の目八阪列中
の図扇ととるこれをうるて九州旅の中
湯成なりもしる大阪の印刷所

○湯殿古印物語之事（三月三十日）深更ニ
話しもち少人話柄と
笑談く放下の一情景也
明大典紀念と御宸筆
等の寄附もち冬季
三度蔵ニも伝教を
光湯殿古印の一人
為の寺ニを納ニ
意しつゝあるより
なりとの事ニ付湯殿の儘ニ
ても宸筆の御物を二千円
ゝ御名寄ゝ様ニも
東京商報

ニ乗ゝこまの公あるう
ゝ寄ちゝ
の湯ニ
ゝ北寺ニ
と称さ
ゝ納め
ゝ物中の
念ニ数
ゝ寄ゝ
ゝ基寄ニ
の内の御歌
示さる

ゝ
ゝ
ゝ

一例を挙ぐるに過ぎざるべし。

○大仏の周囲の蓮弁に大徳寺の印を捺したるは十中八九の周囲皆然り。一周に周囲一尺十寸を算す。形七寸のものを味を見るに、大仏の表面の如きは、みな重ねて刻したるやに見ゆ。このことを知らざれば、おもてに刻したる文字八、九寸を算すべし。周囲も大徳寺銭の如きは、みな杉重元治の仕業なるべし。

東博図書

東京都立中央図書館蔵

大夫の説を用ゐて徴しる際の参
考を要するのまゝ一帙に蔵する也
なるべくやうも詳細記の書
方の目録もあるの外傳の目録
もあり文部に於ても新しき書
の書綴をもつくるべきなれど
蔵書家に於も神棚に上げてくべ
きしるの也

内容を見れば後世に伝ふるの説をなす
文の内一二を挙ぐるに多和神社の多和文庫と
傳ふ大神の託宣を記せるの書と
五綴ぢうんこれそれ書也

書と傳ふる時の書ることを
世の政ることを又地
名部章も一読すべ
きことの書也こ三行の
永初元年の墓月二字の間ろ
の字を書き改めんとせ
塗抹しあることを研究
内容又大西祥胤を論ずる
る余のもの人也
活版二十冊を綴ひ

東京府廳

東京帝國大學圖書館

等身大の御像を作らせ奉り
里俗呼て弥生世中 殺生
こと也 今も今も成ても
殺生出来の時 其の
する法也 奥も十枚
の字を おろす事
有る 御像の料紙 表の蓋を
これを載 拝観を許さる
る咄をきゝ 容を改
する 観音 ゆ
る心 字 の無きを
心 の板の

大正四年七月三日收宅の聖旨記す

東京帝國大學

東京帝國大學

閲覧室

酒泉太守

東京都立中央図書館